

社会科固有の「読解力」形成のための授業構成と実践分析(Ⅲ)

—新聞の読み解きを手がかりにして—

關 浩 和 原 田 智 仁 吉 水 裕 也 米 田 豊
 (兵庫教育大学)
 入 江 兼 司 小 寺 研
 (兵庫教育大学附属小学校)
 戸 出 彰 男
 (兵庫教育大学附属中学校)

本研究は、社会科授業の開発と分析を通して、「社会科固有の読解力」とは何かを解明しようとするものである。本研究を始めるにあたり、「社会科固有の読解力」について、次の仮説を立てている。

- (1) 社会科固有の読解力は、対象に即した科学的理論をベースにして形成される。
- (2) 社会科固有の読解力は、専心的な体験・表現活動ではなく、分析的な探究活動を通して形成される。
- (3) 社会科固有の読解力により形成される認識は、主観的知識の増殖ではなく、客観的知識の成長である。

上記の仮説に基づき、第三年次となる今年度は、第5学年単元「わたしたちのくらしと情報」の開発・実践を行った。社会科における読解力形成について、新聞を取り上げ新聞の読み解きを中心に、単元の中核となる本時の授業と振り返りシートのポートフォリオ的評価の分析に力点を置いた。

キーワード：小学校社会科，読解力，情報社会，メディア・リテラシー，新聞

關 浩和・原田智仁・吉水裕也・米田 豊：兵庫教育大学・教育実践高度化専攻・教授，〒673-1494加東市下久米942-1

關 (hiroseki@hyogo-u.ac.jp), 原田 (toharada@hyogo-u.ac.jp), 吉水 (yosimizu@hyogo-u.ac.jp), 米田 (komedal@hyogo-u.ac.jp)

入江兼司・小寺 研：兵庫教育大学・附属小学校・教諭，〒673-1421兵庫県加東市山国2013-4

戸出彰男：兵庫教育大学・附属中学校・教諭，〒673-1421兵庫県加東市山国2007-109

Development and Analysis of Social Studies Lesson for Promoting the Reading Literacy of Society(Ⅲ): Through the Class Reading Newspapers

Hirokazu Seki, Tomohito Harada, Hiroya Yoshimizu and Yutaka Komeda
 (Hyogo University of Teacher Education)

Kenji Irie and Kei Kodera
 (Attached Elementary School, Hyogo University of Teacher Education)

Akio Tode
 (Attached Middle School, Hyogo University of Teacher Education)

This article explores the reading literacy of society through the development and analysis of social studies lesson. The hypotheses in this research are as follows.

- 1)The reading literacy of social studies is formed based on scientific theories.
- 2)The reading literacy peculiar to social studies is not synthetic but analytical.
- 3)The recognition formed by the reading literacy peculiar to social studies is not subjective but objective.

Based on these hypotheses, we developed a lesson plan of "Our life and information: through reading newspapers" in the 5th grade, then practiced and analyzed children's reflective sheets. As a result of this research, it has been made clear that these methods are effective to the formation and the evaluation of the reading literacy of social studies.

Key Words: social studies class, reading literacy, information society, media literacy, newspaper

Hirokazu Seki, Tomohito Harada, Hiroya Yoshimizu, Yutaka Komeda: Professor, Advanced Professional Development in School Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Shimokume, Kato-city, Hyogo, 673-1494, Japan

Kenji Irie, Ken Kodera: Teacher, Attached Elementary School, Hyogo University of Teacher Education, 2013-4, Yamakuni, Kato-city, Hyogo, 673-1421, Japan

Akio Tode: Teacher, Attached Middle School, Hyogo University of Teacher Education, 2007-109, Yamakuni, Kato-city, Hyogo, 673-1421, Japan

1 問題の所在

本研究は、社会科固有の読解力形成のあり方を探るものである。大学と附属学校の連携による社会科授業研究は、テーマを「社会科固有の読解力形成のための授業構成と実践分析」として進めている。昨年度は、小学校第4学年単元「ごみのしまつ」を取り上げ、フローマップの作成を通して、読解力形成を意図した授業開発を行い、理論の妥当性を検証した。フローマップとは、流れ(flow)をグラフィカルに表現する図であり、現状にある社会のシステムがどのように機能しているのかを明らかにし、問題点を明確化するための手法として位置づけられたものである。事象間の流れを把握し、事象間の関係性を見つけることで、自分なりの解釈を引き出せることができた実践であった。第4学年ということで、社会的事象の関係性について理解することの難しさが予想されていたが、フローマップによって、学習した認識内容を関連づけたり、見方を適用して考えたりすることができることを検証した。

社会科におけるPISA型読解力は、社会そのものをテキストと捉え、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力であり、情報の「受信・受容」「思考・判断・創造」「発信・提示」という三つの要素の総体である。社会科においては、自分の考えを文章で書いたり、表現したり、情報や資料を分析・解釈し、既存の知識や経験と結びつけて、批判的に検討したり、自分なりの意見を論述したり、説明したりするという論理的な思考力に関わる能力として言語力が注目されている。これは、伝える力や調べる力などを含めた言語力である。社会科では、学習者が、テキストやグラフ、図表を一つの情報として意識し、事実を読み解くだけでなく、情報の持つ意図を読み解き、情報と社会との関係性や社会的背景に迫ることが必要である。

今年度は、昨年度の成果を活かせるように、第5学年単元「わたしたちのくらしと情報」において、メディアの一種である新聞に着目する。新聞の読み解きを単元の中核に位置づけて、継続的に読み解きを行うことで、社会科固有の読解力形成につながるのではないかと考えている。その際、子どもに振り返りシートで、継続的に自分の言葉でリフレクションさせることを試みる。

読解力形成過程について、客観的な知識の成長を評価するために、次の手順で研究に取り組む。

- ①全国の地方紙を取り寄せる。(同日の新聞)
- ②同日の地方紙を比較して記事の内容を読み解く場面を授業実践の中核に位置づける。
- ③授業実践の過程は、子どもの読解の過程がたどれるように、子ども自身の考えを表現させ、振り返りシート(授業記録)をポートフォリオ的に保存する。

④教師は、新聞の読み解き過程と子どもの振り返りシートを質と量の両面から分析し、読解の成長過程を把握し、評価する。

⑤読解力形成のための授業構成を評価し、次の実践に活かせるようにする。

(關 浩和)

2 授業構成のねらいと実際

2.1 教材解釈

子どもは、多くの情報に囲まれて生活している。現代人にとって情報源の主流は、テレビやインターネット(携帯電話も含む)である。音声と映像を通して情報を伝えるテレビやクリック一つで情報にたどり着けるインターネットは速報性や利便性に優れ、子どもからも支持されている。

しかし、テレビでは事実報道に続いてコメンテーターの解釈が加わることによって、印象が大きく変わることがある。また、インターネットでは、情報ソースや出典がはっきりしない情報も多くあり、それらの信憑性は低い。情報が氾濫する現代では、簡単に情報が入手できる反面、受け手側がその情報を取捨選択し、正しく判断できるかどうか重要になってくる。

そんな中、今、改めて注目されているのが新聞である。新聞の最大の特徴は、読者に読み取り方を委ねている点にある。新聞を広げると、大小様々な記事が詳細に記載されている。新聞社は、重要度や世間の関心度に応じて記事の大きさを変えているものの、基本的には事実を記載している。そして、読者はそれを理解しながら、自分に必要な情報を取捨選択し主体的に読み取っている。故に、新聞は、記事の大きさや紙面構成から送り手の意図をつかみやすく、主体的に情報を読み取る力を高める教材として優れていると考え、新聞を単元を中心に据えて、授業構成を試みた。

本単元において、子どもと新聞を深くつなぐ手立てとして、全国各地の地方紙(45社)を準備する。一人が一紙ずつ選び、読み取りを行う。新聞は、北は北海道から南は沖縄まで発行元はばらばらで、同じものは一つもない。中には、新聞の名前からはどこで発行されているのかさえ、判断できないものもある。その意味で、新聞は子どもの興味・関心を高め、より深い読み取りにつながるだろうと予想する。

また、発行元が異なる紙面は格好の比較の材料となる。比較材料の一つとして昨年末、京都で行われた全国高校駅伝の記事に焦点をあてる。なぜ、全国高校駅伝の記事を取り上げたかという、全国都道府県の代表が男女それぞれ1チームずつ出場し、地元の期待を背負っているため、地元にも当然関心の高い大会であり、優勝チームの都道府県の新聞は取り上げる価値も高いと思われるからである。反対に成績が芳しくなかった都道府県の新聞

は取り上げ方も低いのではないかと予想される。それぞれの都道府県によって、同じ全国高校駅伝のニュースなのに、ニュースバリューが異なる典型的な事例になり得る。

実際、大会結果の報じ方は、新聞社によって大きく異なっている。大会総評に加え、写真や区間記録、地元の代表校の選手や関係者の声などを大きく紙面をさいて掲載しているものもあれば、大会結果を簡単に数行で伝えたものもある。その違いの要因を探り、話し合うことで、必然的にそれぞれの地域に住む読者を意識した情報発信者側の意図に気づくことができる。

授業では、まず、新聞読解を中心に構成し、話し合いの中で見えてきた解釈をもとに、それぞれの発行元の地域について調べ学習を行い、駅伝の記事はもちろん、それ以外の様々な地方の出来事を綴った記事を通して地域の特色を見つめていく。そして、国土の学習へとつなげることが可能である。

授業構成は、三つのテーマで構成する。まず、「情報とは？」のテーマで、くらしの中での情報について考える。私たちの日常生活が多くの情報によって支えられていることや、情報メディアとどのように関わっているのかを具体的な場面を想起しながら話し合う。次に「情報を読み解こう」のテーマでは、全国の地方紙の紙面を比較読みすることで、発信者側の意図を受信者側の立場で考える。その際、地元新聞社の記者をゲストティーチャーとして招き、地域と新聞のつながりや情報を分かりやすく伝えるための記事の書き方などを聞くことで、学習を深化させていく。さらに、最後のテーマ「情報交流をしよう」では、自分が気に入った新聞記事を選び、それをもとに意見文を書いて交流できるようにする。この学習を通して、情報発信側の意図を読み取り、適切な判断のもとに、情報の活用ができる資質を育てることをねらいとする。また、社会の中での「情報の価値」についても考えていきたい。

2.2単元の指導

単元名「わたしたちのくらしと情報～新聞をよみこよう～」

2.2.1 目標

- 新聞に関心をもち、複数の新聞から記事内容や紙面構成等の相違点や共通点、その理由について話し合っている。
- 新聞紙面を通して、記事の書き方や紙面構成による情報の伝わり方の違いについて考える。
- 情報を受け取る側は、紙面から情報を正確に読み取り正しく判断することが大切であることを理解する。

2.2.2 単元計画(全11時間) 次頁参照。

2.3 授業の実際

2.3.1 第一次「情報とは？」 (3時間)

ここでは、「情報」というキーワードをもとに、知っている事や疑問に思ったことを出し、話し合った。子どもからは日常生活の中で「情報」の具体として、「日々の事件やニュース」「明日の天気」「今の流行」など幅広く出された。そして、それらの情報を得るために活用するメディアを選び、線をつないでいくと、「テレビ」「新聞」「インターネット」に集中していることがわかった。続いて、三者を比較してそれぞれのメリットとデメリットについて話し合った。それらをまとめ整理してみると、「速報性」に優れたテレビやインターネットに対して、新聞は豊富な「情報量」、「保存性(記録)」という点がメリットとしてあがった。逆にデメリットとしては、「速報性」に欠ける新聞、情報の「信憑性」にかけるインターネットというものがあがった(資料1参照)。

資料1 情報メディアの比較

	インターネット	テレビ	新聞
すぐれている	<ul style="list-style-type: none"> ●速報性 「 실시간」や事件など、すぐに情報を流すことができる。 ●情報量が多い ●自分が調べたいことが、すぐに調べられる。知りたい情報のキーワードが浮かべば、簡単に得られる。 ●動画が見られる ●CM(広告)無視ができる。いらない情報は無視することができる。クリックしなくても良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ●速報性 「 실시간」や事件など、すぐに情報を流すことができる。 ●音声や動画で伝えてくれるので、わかりやすい。 ●障害者のことも考えた放送もしている。(手話・文字放送) ●一週間の番組が知られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●情報量が多い。一つの出来事について、くわしく書かれている。 ●保存しやすい。紙なので折ったり破ったりして保存することができる。また、速報性がないので、調べたい情報が残っている。 ●持ち運びができる。いつでもどこでも閲覧できる。 ●CM(広告)無視ができる。いらない情報は無視すればよい。
おとっている	<ul style="list-style-type: none"> ▲つぞ情報がある。 ▲電気がないと見られない。災害時の停電による。停電の時使えない。 ▲ウィルスに感染(かんせん)すると情報がもれることがある。 ▲悪口が流れることがある。 ▲電気をいれて、使えるまで待たなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> ▲持ち運びができない。 ▲電気がないと見られない。災害時の停電による。停電の時使えない。 ▲情報量が少ない。本日の出来事しか書かれていない。 ▲CM(広告)無視ができない。見なくても、おぼすことができない。いらない広告、CMが入ってイヤ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●速報性 紙の印刷が遅れているので、最新の出来事をすぐに伝えることができない。 ●使用費、ゴミになってかさばる。 ●文字が小さくて、読みづらい。

そして、これらをもとに、豊富な「情報」の中から必要な情報を選び読み取ることを目指して、第2テーマ「情報を読み解こう」に向かった。

2.3.2 第二次「情報を読み解こう」(6時間)

まず、一日分の新聞紙面の構成について知っている事を話し合った。子どもたちからは、朝のテレビ番組で表紙に書かれた注目記事を「今日の一面」と紹介していたこと、また、テレビ欄、スポーツ欄と共に地域の出来事を取り上げた地域欄など話題・ジャンルによって紙面が分かれていることが出てきた。次時の学習では、子どもたち一人一人が一日分の新聞を持参し確認した。集まった新聞の多くは全国紙や地元の地方紙(神戸新聞)であ

資料2 新聞の題字(一部抜粋)



2.2.2 単元計画 (全11時間)

○…1時間 ◎…2時間

テーマ	学習活動	教師の働きかけ	評価の視点・方法
<p>情報とは？</p> <p>3時間</p>	<p>◎「情報」というキーワードをもとに、知っていることや疑問に思ったことを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「情報」って何？ ・普段必要な「情報」は何？ ・「情報」を入手する方法は？ <p>○一日分の新聞紙面の構成について疑問を出し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一面に大事な話題 ・中程に地方版がある。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>・全国どの新聞でも同じだろうか？</p> </div>	<p>教師の働きかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活で「情報」を欲する具体的な場面を想起させ、その時の情報収集法について考えさせる。 ・代表的な3つのメディア（テレビ・インターネット・新聞）の活用方法を考えることで、それぞれの特徴を整理する。 ・情報テレビ番組の新聞コーナーを例に出し、一面トップが国民的な関心事であることに気づかせる。 ・見開き一面の記事数を数えたり記事内容を分類したりすることで、多くの情報が組み込まれていることに気づかせる。 	<p>評価の視点・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活が多くの「情報」によって支えられていることに気づく。 ・「情報」の活用場面を想起し、考えたことを発言している。 <p>・持参した新聞の紙面を活用して、自分の気づきを友だちと共有している。</p>
<p>情報を読み解こう</p> <p>6時間</p>	<p>◎全国の地方紙を読み比べて、気づいたことを発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独特の新聞社名（～民報～日日） ・紙面構成がほぼ同じ ・県独自の話題がある。 ・同じ記事でも、使っている写真や記事の大きさが違う。 <p>◎全国高校駅伝に対する地方紙の取り扱いの違いから、その理由について話し合う。</p> <p>〈本時2/2〉</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>1つの事実</p> <p>さまざまな見方 = 「真実」</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">A県 地域</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">B県 地域</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">C県 地域</div> </div> </div> <p>○前時の考えを検証するために、それぞれ発行元の地域を調べる。</p> <p>○新聞関係者をゲストティーチャーとして招き、話を聞く。 記事を書く時の留意点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 地域とのつながり 2) 書き方の工夫 <ul style="list-style-type: none"> ・逆三角形の法則 ・リード文 (5W1H) 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な紙面構成が同じであることをおさえると共に、新聞社の名前は地方欄の内容等に地域ごとの独自性があることに気づかせる。 ・同じ記事でも、使用写真やタイトルが違うことに気付かせ、どうして違いがあるのかという課題意識をもたせる。 ・駅伝関連記事を切り取り、画用紙に貼り出させることで、30社の紙面の大きさを視覚的に比較できるようにする。 ・記事の取り上げ方の根拠として考えられることを当日の成績以外の要因（予選の成績・県歴代記録との比較・県歴代順位との比較）を探りながら、学級全体で検証していけるようにする。 ・「地域情報」に対して、新聞社（情報発信者）と購読者（情報受信者）それぞれの立場に立って考えさせるようにする。 ・地方紙の作り方について子どもの解釈を伝えた上で、情報発信者の立場を伝えてもらうようにする。 ・各紙の新聞記事の一文を拾い出しどの記事にも簡潔に事実をまとめたリード文を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の地方紙を見比べることで、気付いたことを進んで発表している。 ・記事の取り扱いの違いやその理由について自分なりの考えをもっている。 ・友だちの根拠を聞き紙面を比較することで確かめようとしている。 ・1つの事象の取り扱いの違いから、新聞社と地域とのつながりについて考えている。 ・地域と新聞のつながりを理解している。 ・事実が伝わりやすい書き方について理解している。
<p>情報を交流しよう</p> <p>2時間</p>	<p>○今までの学習をもとに記事を選び、選んだ理由や読んで感じたことをワークシートに書く。</p> <p>○新聞記事とそれに対する意見文を交流し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを用意し、新聞記事の下に投稿風に「読者からの声」の欄を設け、本物の新聞の雰囲気近づける。 ・論評に対して、複数の児童が考えを重ねることで、1つの事象を多面的な視点でとらえられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・記事の意図を読み取り、自分の考えを書いている。 ・新聞記事と友だちの意見文につなげて、自分の考えを述べている。

資料3 2010年12月27日 全国の地方紙が伝えた一面記事

	新聞社名	トップ記事の内容	カテゴリー
1	千歳民報	RBP中期経営計画まとめる	地域
2	北海道新聞	漁業4社ロシアに裏金	地域
3	十勝毎日新聞	山林売却を検討3割	地域
4	苫小牧民報社	特産品で商品開発	地域
5	河北新報	内閣不支持67%	政治
6	東奥日報	開業対応に温度差	地域
7	岩手日報社	内閣不支持67%	政治
8	岩手日日新聞	一関学院 力走13位	スポーツ
9	福島民報社	豪雪300台一夜明かす	地域
10	山形新聞	内閣不支持67%	政治
11	秋田魁新報	内閣不支持67%	政治
12	下野新聞	内閣不支持67%	政治
13	神奈川新聞社	内閣不支持67%	政治
14	新潟日報社	内閣不支持67%	政治
15	北日本新聞	小沢氏離党勧告	政治
16	福井新聞	内閣不支持67%	政治
17	富山新聞	小沢氏離党勧告	政治
18	北國新聞	小沢氏離党勧告	政治
19	山梨日日新聞	検察一転4分の1を起訴	その他
20	静岡新聞	小沢氏離党勧告	政治
21	岐阜新聞	内閣不支持67%	政治
22	中日新聞	市議会解散6割賛成	政治(地方)
23	伊勢新聞	知事選	政治(地方)
24	奈良新聞	県予算要求4722億円	政治(地方)
25	京都新聞	内閣不支持67%	政治
26	日本海新聞	内閣不支持67%	政治
27	山陰中央新報	4分の1一転「起訴」	その他
28	島根日日新聞	自転車て茶のまち巡り	地域
29	山陽新聞	興譲館V	スポーツ
30	中国新聞	内閣不支持67%	政治
31	宇部日報	第九でハッピーエンド2010	地域
32	山口新聞	内閣不支持67%	政治
33	愛媛新聞	内閣不支持67%	政治
34	徳島新聞	小沢氏離党勧告	政治
35	四国新聞	内閣不支持67%	政治
36	高知新聞	小沢氏離党勧告	政治
37	西日本新聞	韓国機、滑走路に誤進入	地域
38	長崎新聞	内閣不支持67%	政治
39	佐賀新聞	内閣不支持67%	政治
40	宮崎日日新聞	新知事に河野氏	政治(地方)
41	熊本日日新聞	一転起訴4分の1	その他
42	南日本新聞	鹿実 全国制す	スポーツ
43	南海日日新聞	歳末大売り出し、目標達成	地域
44	琉球新報	4分の1一転「起訴」	その他
45	神戸新聞	内閣不支持67%	政治

資料4 岩手日日新聞のデスクからの回答

兵庫教育大学附属小 5年1組様 岩手日日新聞社報道部次長 小岩 聖二

1面トップ記事のあり方について

新聞を通じた学習に、岩手日日を活用いただき感謝しています。さて、疑問のあった点について、新聞社としての見解を述べさせていただきます。新聞社は、大きく分けて全国紙と県紙、地方紙に大別されます。私共の岩手日日は、このうちの地方紙に該当し、四国4県に匹敵するといわれる広い岩手県の中にあつて、主に県南地方を中心に新聞を発行しています。「岩手日日」(一関・両磐地方)と「たんこう」(但江地方)、「きたかみ」(北上・西和賀地方)、「はなまき」(花巻地方)の4ブロックに分け、それぞれ異なる新聞(一部内容共通)を発行しています。地方紙の特色は、住民の視点に立った地方色豊かなニュースにあると思います。

毎日の新聞発行にあたり、4紙それぞれの1面トップは地方の出来事を優先し、住民の生活に役立つ紙面づくりに日々努力しています。とはいえ、県内の出来事、国内外の出来事を無視してはなりません。通常は、2ページに県内版、3ページに国内版を配し、他紙に劣らない内容を読者に提供しています。なお、地元選出の小沢一郎民主党元代表に関する重大事案などが発生した場合には、1面トップ扱いとし、社会面にも関連記事を展開していくこともあります。いずれ、地方の特色を最大限に生かした新聞にこそ、岩手日日の存在価値があるものと考えています。

ったが、ページ数や話題の順序は同様であった。

続いて「全国どこの新聞でも同じだろうか?」という問いから、一人に一社ずつ全国各地の新聞を配布した。配られた新聞の中には名前だけ見てもどこで発行されているのか分からないものもあった。また、背景に書かれた絵や模様にも地域の特色を感じさせる工夫が見られ、子どもの意欲を高めた(資料2参照)。紙面構成についてはどこの新聞も大きく異なることはなかったが、それぞれの地域版では、独自の話題が記事として掲載されていることはすぐに分かった。

続いて、「一面トップ記事」に着目した。一面にのる記事は、世間の関心事や読者(購読者)が注目している出来事である。その中でも、題字横(紙面右上)に書かれた記事は「一面トップ記事」と呼ばれ、その日の新聞の顔ともいえる。子どもたちに配布した新聞は同日(2010年12月27日)の朝刊であった。しかしながら一面トップ記事は様々であった(資料3参照)。そこで、一面トップ記事の扱いの違いについて考えた。ここで、授業の様子を紹介する。

T 数字のクイズから入ります。何の数字でしょう。

(45分の3という分数を提示する。)

45…みんなに配った新聞の数です。

3…全国高校駅伝が一面トップの新聞です。

・鹿児島…南日本新聞……男子の優勝

・岡山……山陽新聞……女子の優勝

・岩手……岩手日日新聞…男子13位 女子27位

T 駅伝の記事が大きいということは、何を意味するのだろうか。

C 読者に伝えたいときや期待する時に大きくなる。

C 駅伝の成績が良かったところ

C 予選のタイムがいいところや順位がいいところ。

C 注目されている学校。

T 岩手日日新聞は、何で高校駅伝がトップ記事になっているのだろうか。男子13位、女子27位なのに?

ちょっと「岩手日日新聞」の記事を読んでみましょう。

男子第61回・女子22回全国高校駅伝競走大会は26日、京都市の西京極陸上競技場を発着点とする男子7区間(42.195km)、女子5区間(21.0975km)のコースで行われた。…中略…

…千葉裕司監督は、「1区は想定内だったが、その後には上げられなかった。選手が持っている力を発揮させることができなかった。私の指導が至らなかった。」と話した。盛岡女子は前回大会の40位を大きく上回る過去最高順位。第6、7回大会の花巻東(21、27位)に次ぎ、県勢として過去3番目の好成績となった。

(大型テレビに新聞記事を映して、教師が読み上げる。)

T この記事からどんなことがわかりますか。

C 前より順位がよくなった。

C 大きく成績が上がった。

こうして子どもたちは、記事内容から岩手日日新聞が一面トップに駅伝の記事をもって来たことを理解した。しかし、ここで新たな問いがうまれた。同じ岩手で発行されている岩手日報では、「菅内閣の不支持が67%に」がトップ記事となっていた。

T 同じ岩手県の新聞なのにトップ記事が違うのはなぜだろう。



写真1 「岩手日日新聞」と「岩手日報」の比較

C 新聞社とか、地域が違うから記事が違う。

C 岩手県全体のことを表しているから記事が違う。

C 岩手日日と岩手日報の編集した時刻が違うのではないかな。少しでも新しい情報を掲載したのではないかな。

C 大ニュースが違う。

C 同じ県でも新聞社の伝えたい大切さの内容が違うのではないかな。

子どもたちの中には、既習の知識(印刷所から近い地域では配達までの時間的なゆとりがあるので、最新版の記事に差し替えることができることなど)を活用して答える子もいた。そこで、2社の新聞一面を縮小コピーしたものを配布し、紙面から考えることとした。すると、

C 岩手日日新聞の発行所が一関になっているのは、一関学院(男子出場校)が出場したからではないかな。

C 大切にしていることが違うからではないかな。

といった考えが出てきた。この真偽については、子どもたちと相談し、後日新聞社にFAXを送り、新聞社報道部より新聞社側の考えを得ることができた(資料4)。

続いて、一面トップ記事をジャンル別にまとめる作業を行った。すると、政治関連の記事が圧倒的に多いことが数字からも読み取れた。

○「菅内閣の不支持率67%……19社

○小沢氏離党の記事……4社

○市議会解散(中日新聞)

○知事選(伊勢・宮崎)

それに対して、1社だけしか取り上げていない独特の記事もあった。東奥日報の記事では、東北新幹線の開通に伴い、年末年始の商業施設の営業方針に温度差があることを取り上げていた。そこで、

T 同じ日の朝刊なのに、何でこんなに扱っている記事が違うのか。(ワークシートに書かせる。)

C 地域によって、新聞を読む人が知りたいことが違うから。

C 今一番伝えたいことが違うから。

C 全国の情報を流したいか、地域に絞った情報を流したいかによって違う。

T 政治よりもスポーツの話題が多い時はどんな時だろう。

C オリンピック。

C 世界新記録の更新など国民が注目すること。

最後に、男子の鹿児島実業の優勝が決まって、鹿児島で配られた号外を紹介し、本時のまとめとした。



写真2 一面記事を比較した授業板書

2.3.3 第三次「情報を交流しよう」(2時間)

今までの学習をもとに、一人一人が地方ならではの独特の記事を選び、選んだ理由や読んで感じたことを書き出し、意見交流会を行った。子どもたちからは、掲載された記事が、地元に住む人々にとって関心あることであり、注目度が高く「価値ある情報」であることを理解することができた。

そして、単元のまとめとして「情報」について考える時間をもった。新聞社をはじめとする情報産業は、情報を欲する人(新聞で言えば購読者)との関係によって成り立っている。企業である以上社会貢献よりも利潤追求という考えの上にある。故に、新聞社は、購読者が欲する情報をより早く、正確に、分かりやすく伝えるといった企業努力を行っているのである。本単元の一面トップ記事の扱いについて考えた授業では、複数の新聞を比較することで、それぞれの新聞社によって異なる「情報の価値」について理解する機会となったと考える。

(入江 兼司)

3 読解力形成過程の分析と評価

3.1 学級全体の読解力形成過程

3.1.1 本時における読解力形成過程の分析

新聞を読み解く授業開発⁽¹⁾のポイントは、①新聞ができるまでの流れ、②ニュースとは何か=何が話題とな

るのか、③新聞の特徴(紙面構成を含む)である。本時は、②のニュースとは何か、何が話題となるのかから③新聞の特徴(紙面構成)に至る段階で、その日の新聞の顔である1面記事の構成に焦点化した授業である。本時の問いの流れは、次のようになっている。

Q. トップ記事は、どんな内容の記事が載るのか。



Q. なぜ、同じ県の新聞なのにトップ記事が違うのか。



Q. 同じ日の朝刊なのに、なぜ取り扱う記事が違うのか。

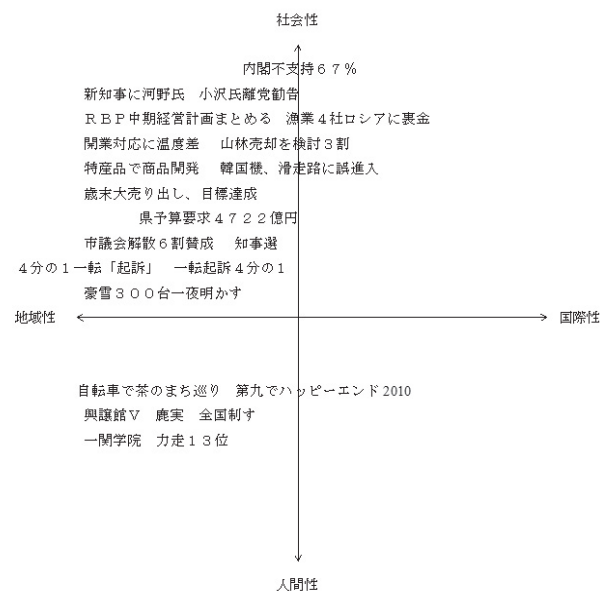
新聞記事を構成するカテゴリーは、通常、歴史・政治・文化・地理・経済・社会の分類が一般的である。新聞は、カテゴリーごとに紙面が構成され、それぞれの面でも、ある一定のきまりに基づいて、構成されている。その中で、本時は、記事に取り上げる要件として、次の六要素を視点にして探っている。

- | | | |
|------|------|------|
| ①最新性 | ②地域性 | ③国際性 |
| ④社会性 | ⑤人間性 | ⑥記録性 |

さらに、トップ記事になるためには、ニューバリューが必要で、その時の流行や話題性、人気のあるものでなければ、読者のニーズには応えられない。

本時で取り上げたすべてのトップ記事を、地域性と国際性、社会性と人間性を軸にしてマトリックスを構成し、資料5に示している。

資料5 ニュース(2010年12月7日の新聞記事1面)の話題性の分類



地方紙は地域に密着した話題を重視しており、国民的関心事である政局の話題と絡めて、常に編集部で議論されながら、紙面構成が決定されている。また、地方紙で

も、複数県にまたがって発行するブロック紙と県内で発行する県紙では、トップ記事の内容も変わってくる。ここでは、「地域性」という概念も変わってくる。これは、本時で取り上げた「岩手日日新聞」と「岩手日報」の違いでもある。一関市を中心に発行している岩手日日新聞は、駅伝の成績に関係なく、地元の一関学院が出場した高校駅伝を一面トップ記事で伝える。しかし、優勝はおろか入賞にも至らない成績では、岩手全県下をエリアとしている岩手日報では、内閣不支持率67%の方が話題性としては大きいと判断したのである。

3.1.2 本時における読解力形成と評価

本実践は、新聞の意義を考えることで、情報社会に生きる子どもの社会を見る目を鍛えることにある。情報伝達の速さ、迅速性においては、テレビやネットに優位性がある。しかし、情報量や分析の深さにおいて新聞に優位性がある。注目すべき解説記事や専門家の評論は、ニュースの概要が明らかになった後で紙面に掲載される。ニュースを違った視点で見たり、それによって起こる今後の問題や展開が予測できることになる。

本実践は、テレビやインターネットと新聞の比較から読解を始めている。毎日、自宅に宅配されるただの紙切れ程度に過ぎない存在だった新聞が、社会において重要な情報源として存在している新聞に変容している。その読解力形成の過程には、記者による地道な取材活動や編集作業があることや、記事や写真がリアルタイムで送られる技術、全国各地に新聞を毎日送り届ける輸送システムが確立していることなどの具体的な調べ学習による習得段階がベースにあって、本時のトップ記事掲載の理由を探る学習に活用されている。新聞を制作している新聞社の意図や思いを詳細に読解していくことで、社会において、新聞が重要な情報源になっている意義を読み解いている。全国各地で発行されている同じ日の新聞を比較対象としたことで、地方新聞社の特性だけでなく、短絡的な情報をそのまま受け入れるのではなく、批判的な検討を加えたり、情報を見極め、吟味したりすることの重要性を学んでいる。(關 浩和)

3.2 抽出児の読解力形成過程

本節では、振り返りシートを手がかりに、抽出児の読解力形成過程を明らかにする。本研究では、児童の読解力形成過程がたどれるように、振り返りシートに合計5回記入させ、ポートフォリオ的に保存した。振り返り

シートは、①学習を振り返って、②「新聞」ってどんなもの？について、授業時間内に5～10分程度を確保して書かせたものである。そこで、振り返りシートから、どのように客観的な知識の成長が見られるのかを整理し、読解力形成過程についての評価を行う。

3.2.1 個性的な読解力成長と社会認識形成との関係

ここでは読解力成長がみられ、社会認識がよく育っていると考えられる児童(H.K児)の獲得知識を取りあげる。そして、社会科固有の読解力成長の方法である、情報の収集、情報の解釈、推論の省察の三つの段階に分類し(表1)、その形成結果の質を検討する。

本実践では、第一次で「テレビ、インターネットの速報性や利便性、新聞の一覧性や信頼性など、それぞれのメディアの特徴」、第二次で「情報は発信者側の意図により、伝わり方が違ってくること」、そして第三次で「同じ記事に対して他者の意見文を比較することで、情報が同じでも、その時の社会の情勢や受け手によって捉え方や感じ方が違うこと」を理解させるための授業が行われている。

第一次では、新聞の種類や「20811号」という号数など新聞を詳細に観察させる情報収集により、新聞の世界に引き込む場面が読み取れる。第二次では、記事内容の違いの読み取りにより、その理由について解釈させ、疑問を新聞社に送り検証する場面が読み取れる。また第三次では、これまでに獲得した科学知に基づいて「いろいろな道具から情報を得ることで人間の生活やくらしがしっかり成り立っている」という推論の省察場面が読み取れる。

3.2.2 読解力形成と評価

以上のように、情報の収集→情報の解釈→科学知に基づいた推論の省察という流れ、及び推論の省察結果が読み取れた。ただ、振り返りシートでは、児童が持った問いが具体的に読み取れず、そのため推論の省察過程がわかりにくくなっている。本実践では、授業で認識した内容から生まれた問いが推論の省察の質を左右する。そのため、振り返りシートを①今日の学習で知ったことわかったこと、②知ったことわかったことによって予想や考えがどのように変わったか、③新たに浮かんだ疑問、という三項目にし、意図的に知る・わかるを峻別するよう指導することで、情報の収集、情報の解釈、推論の省察の内容が読み取りやすくなる。今後改良が必要である。

(吉水裕也)

表1 H.K児による振り返りシートの記述と読解力の成長

月日	読解力形成のための方法(情報の収集:破線, 情報の解釈:実線, 推論の省察:波線)
第一次 1月17日	①新聞というのはいろいろな種類があるけど、 <u>「20811号」という号数や「40593号」というのもあったから、けっこう新聞にも歴史があるんだなあと思いました。</u> 新聞について、いろいろなことを知りたいです。 ②新聞、 <u>1つ1つの会社によって、少し情報がちがうけど、持ち運びもできて、くわしくてわかりやすいものだなと思いました。</u>

第二次 1月24日	①今日の学習ではいろいろな地方の新聞のことについて、みんなと話しあって楽しかったし、 <u>いろんな県や地方によって、新聞の内容がちがうのがおもしろいと思いました。</u> ②新聞というのは、昔からつづくテレビとはちがった情報を伝えるものなんだと思います。
1月31日	①今日の学習で、新聞社に聞くのは最初「電話」がいいと思ったけど、「FAX」の内容も決まったし、あとは自分の考えが あっているか検証してもらえ るのがすごくわくわくしたし、楽しみです。新聞は昔から 続くテレビやインターネットとは少しちがう けど、大切なものなので、作っている人から意見をもらえるのはうれいと思いました。 ②新聞は上にも書いたけど、デジタルとはちがった情報を伝えるものだと思います。
2月2日	①今日の学習で、 新聞の書き方がよく分かりました。 新聞はいつ見ても字が小さいから文の量が多いとあまり感じなかったけど、ノートに書いてみると けっこうあるんだな と思いました。 ②テレビとリード文は一緒だけど「説明されている」というより「読む」という印象が大きくて、デジタルとは少しちがった読み物だと思います。
第三次 単元 終了後	①私が情報について思ったことは2つあります。1つめは、情報と人間のくらしです。考えてみると、 人間は毎日いろいろな情報を読み取って生活して いて、でも、その読み取り方、読み取る方法もたくさんあるんだと改めて思いました。それぞれの情報を読み取る道具もそれぞれのメリット・デメリットがあり、そして、そのいろいろな道具から情報を得ることで人間の生活やくらしがしっかりと成り立っていることがわかりました。2つめは情報の大切さです。1つめにも書いたように、インターネット、テレビ、新聞、雑誌や最近ではワンセグ(けいたい電話)でも情報を得られるようになりました。しかし、「情報」を人々に伝えるというのはテレビなどではたくさんの時間がかかります。けど、日本は地震大国や火山大国でもあるから、日本人にとって「情報」はとても大切なものと言うことがわかりました。 ②情報の学習で「情報」というのは人間に欠かせない、生活に欠かせないものというのがわかりました。

3.3 読解力形成のための授業構成と評価

本継続研究では、研究のための基本仮説と授業開発のテーマ、及び仮説検証の方法については相互に議論を通して合意形成を図るものの、具体的な授業構成は実践者に委ねている。本実践は、入江教諭が小寺教諭と相談しつつ単元計画を立案し、実践したものである。そこで、筆者も同じ研究グループの一員ではあるが、読解力形成の観点から授業構成の是非について論じてみたい。

本単元「わたしたちのくらしと情報-新聞を読み解こう-」では、複数の新聞の比較を通して、紙面構成や記事の内容の相違点と共通点に気づかせ、その理由について話し合わせることで、情報社会の特質を理解させようとするのがねらいである。そのために、単元の展開を(1)情報とは?(2)情報を読み解こう、(3)情報を交換しようの3次で構成し、中心となる第2次に関しては、①児童の関心に沿うタイムリーな記事「全国高校駅伝」に着目し、②全国各地から集めた大会翌日の新聞のトップ記事を比較させた。つまり、情報メディアの中から新聞を選択し、新聞の中でも特に全国高校駅伝の読解に焦点化したのである。入江教諭自身が述べているように、そこでは新聞を情報社会の特質に迫るための教材と位置づけている。本単元に多くの児童が意欲的に取り組み、読解力の形成に成功したと評価される理由も、新聞を教材として取り上げ、駅伝大会の記事を比較させたことにあるといっ

ただ、新聞により紙面構成や記事の内容が異なることの読み解きは、はたして社会科固有の読解といえるだろうか。それらは、仮に5年生の時点ではわからなかったとしても、大人になるに連れて自然にわかる常識的な見

方ではないか。例えば、読売系の新聞がジャイアンツ情報を中心に掲載し、神戸新聞がタイガース情報を多く掲載するのはプロ野球ファンでなくとも知っている。社会科固有の読解はそうした常識的、表面的見方を越えて、対象を理論的に捉える見方でなくてはならない。

そもそも、新聞の読み解きには次の二つがある。第一は、新聞に記載された情報の読み解き(何が書かれているかの読解)であり、第二は新聞というメディアの性格の読み解き(なぜそのように書かれているのか、新聞とは一体何かの読解)である。前者は現象(事実)認識に関わり、後者は本質(意味)認識に関わる。社会科固有の読解は後者であるが、そこに至るためには前者の読解が不可欠である。その意味で、両者は相補的な関係にあるといっ

ただ、本実践の場合、前者の読解には成功したが、後者の読解は不十分に終わった。確かに2.3.2で入江教諭が紹介しているように、新聞の記事掲載を規定する要因として、地域のニーズを重視するのか、全国的なニーズを重視するのかがあるということに児童は気づいている。だが、そこから更に一歩踏み込んで、なぜ地方紙は地域のニーズを重視し、全国紙は全国的なニーズを重視するのかまで追究させてはいない。それは多くの子どもが直観的にわかりかけており、教師が後一押しすれば、新聞の持つ意味にまで考えが深まったはずである。だが、その問いを欠いたことで、子どもの関心は新聞の本質から新聞の読み解き方へ移ってしまった。つまり、情報を読み取る側の態度=情報への接し方に論点が移行したのである。

実は、それこそ教師のねらい通りの展開だったともいえる。2.2.2の単元計画が示すように、第2次の最後には

地方新聞の記者を招いて、新聞の作り方について子どもの疑問に答えさせているし、第3次には子どもたちが自ら選んだ新聞記事への感想や意見を述べ合うことで、新聞を多面的に読むことの意義に気づかせている。それはまさに、単元目標の「情報を受け取る側は、紙面から情報を正確に読み取り正しく判断することが大切であることを理解する」に則したものであり、その点で本授業は目標を達成したといえるだろう。だが、社会科固有の読解は不十分だった。それはなぜか。

その理由は、単元構成にあると考えられる。入江教諭は新聞の特質の理解を通して、情報社会での新聞（情報）の読み解き方を理解させた。それは学習指導要領にも示されており、第5学年の重要な目標の一つである。しかし、新聞が産業として成り立っていること、情報社会の本質に迫ることはできないのではないか。つまり、新聞には事実や真実が書かれているが、内容に地域差があるのではなく、新聞が産業として成り立っている以上、新聞記事は商品であるということである。商品だからこそ、企業がマーケットリサーチをして製品を開発し販売するように、新聞社も読者のニーズに即した記事の提供を心がけるのである。新聞に多数の広告が掲載されていることを見れば、5学年の児童にも十分理解可能なはずである。

実はこの産業として新聞をとらえる視点も学習指導要領には示されているが、教科書記述を見ても、入江教諭と同様に情報社会での情報の接し方に重点が置かれることが多い。教師からすれば、そうしたある種の態度主義の方が道徳などと関連づけることも可能であり、授業をしやすいのだろう。だが、繰り返すが、それでは社会科固有の読解力は育たない。社会科として情報社会の特質を読解させるためには、新聞を単なる教材として扱うのではなく教育内容としても位置づけることが必要であろう。そして、徹底的に新聞にこだわり追究することで、情報社会の本質に迫っていく。例えば、次のような単元構成が考えられよう。(1)新聞のどこを読む？(2)新聞により記事の内容や構成が違うのはなぜ？(3)新聞っていったい何？

(原田智仁)

4 小括—課題と展望—

本研究の成果は以下の通りである。第一に、第5学年の情報単元の事例として新聞を取り上げることの有効性が検証された。情報社会という目に見えにくい現代社会の特質に迫るために、学習指導要領は新聞と放送という二つの事例を示しているが、教室で児童が直接手にとって繰り返し読むことのできる新聞は、教育的価値が高いことが改めて確認された。第二に、情報社会の特質を読み解く上で、新聞記事の中から児童が興味や関心を持ちやすいテーマに焦点化し、全国各地の新聞を比較・考察することの意義が検証された。この方法により、新聞を

読み解く視点の多様性—地域性・国際性・社会性・人間性等—に気づかせるとともに、新聞の持つ社会的意味や情報社会における情報との接し方を考えさせることもできた。第三に、抽出児の振り返りシートの分析から、読解力形成は「情報の収集→情報の解釈→科学知に基づく推論の省察」という過程を踏んでなされることが確認された。

他方で、課題として以下の二つが指摘された。第一に、振り返りシートの質問構成に疑問が出された。すなわち今回の振り返りシートでは、児童の抱いた問いが明確に読み取れないため推論の省察過程がわかりにくいという問題である。この解消策として、「知る」と「わかる」を意図的に峻別した問いを工夫することの重要性が指摘された。振り返りシートの改善については、昨年度の研究でも指摘されており、研究の科学性を担保する上でも、評価方法のあり方については改めて検討していきたい。第二に、社会科固有の読解力形成の観点から、授業構成についても課題が指摘された。すなわち、新聞により記事の内容や構成が異なる理由を粘り強く追究すれば、新聞の本質的意味（社会の木鐸としての役割だけでなく、商品としての情報を販売する企業的役割を持つこと）に気づかせられるにもかかわらず、情報社会における正しい情報への接し方という態度形成の方向に進んでしまった。無論、それについて考えることは必要だが、社会科固有の読解を促すためには常識的な新聞観や態度主義を乗り越えねばならないことが指摘された。

(原田智仁)

【註】

(1)小学校や中学校・高校等で新聞を教材にした学習が行われている。NIE (Newspaper in Education) 「教育に新聞を」という活動である。アメリカで1930年代に、ニューヨークタイムズがハイスクールでの新聞利用を考え始めたのが最初であると言われている。NIEを教育上利用している国家は、現在では、世界で52か国にのぼっている。日本では、1985年に静岡で開かれた新聞大会で提唱され、教育界と新聞界が協力して、社会性豊かな青少年の育成や活字文化と民主主義社会の発展などを目的に全国で展開されている。日本新聞協会は、96年にNIE基金を発足させ、NIE事業を「新聞提供事業」と「研究・PR事業」に分け積極的に推進し、98年3月2日新たに設立された日本新聞教育文化財団（新聞財団）へと引き継がれている。次のサイト <http://nie.jp> を参考にされたい。

【参考文献】

- ・日本NIE学会編著『情報読解力を育てるNIEハンドブック』明治図書出版、2008年。
- ・『ようこそ「新聞」へ』日本新聞教育文化財団、2007年。

(2011. 8. 16受稿, 2011. 11. 28受理)